

タンザニア序説

- 学際的方法論によるタンザニアの宗教事情についての考察 -

上 村 敏 文

はじめに

アフリカといってもさまざまな顔があり、サハラ砂漠より南に位置するアフリカと、例えばエジプトでは同じアフリカとは一括りにはできない程の相違がある。また、東と西あるいは南でも全く異なる様相を示していると言ってよいであろう。今回、ここで報告するアフリカは、主としてスワヒリ語が共通語として話されている東アフリカのタンザニアの特に南西部の地方、そしてイリンガという地域に焦点を絞ってゆく。

方法論としては、文化人類学、比較文化論といった20世紀になって学際領域として出現してきた学問類型に、宗教学、社会学、教育学、神学等の伝統的領域分野のあらゆる学問の恩恵を蒙りつつ、特定の学問に奉仕するというよりは、一つのテーマに少しなりとも奉仕するために、逆にあらゆる学問の叡智を結集させることを試みている。一つのテーマとは「何故、日本でキリスト教が伸びず、アフリカで伸びているのか」という古く、しかし今日的課題としてもなお宣教論においては重要なテーマの一つである。

今回実施した2004年12月16日から28日の12日間という調査は、かなり短い期間であり、十分な説得力のある解答をひきだせているわけではない。しかし、2003年にアメリカから1カ月訪問したことを合わせて、今回のテーマの解答の可能性に近づく準備はできてきた。本論文においては、あくまで試論の段階ではあるが、アフリカ、その中でもタンザニアという

魅力尽きない、そして茫漠とした対象へのアプローチの第一歩となる。

人類発祥の地といわれる東アフリカ。イロコイ族の血をひくポーラ・アンダーウッド女史の『一万年の旅路』⁽¹⁾という書物に初めて接したとき⁽²⁾、トロイ遺跡を発掘したシュリーマンが、ギリシア神話を読んで、その実在を信じたのと同じ感覚を私は持った。北米のインディアンのルーツが、考古学者との協力により、おそらくは東アフリカをその出発点として、ユーラシア大陸を横断して、陸続きであったベーリング海を徒歩で渡り、最終的に五大湖のほとりに辿り着くという壮大な口承文学であり、叙事詩である。⁽³⁾ いわゆる「学問的」ではないが、この伝承が初めて文字化された時、アメリカはもちろん、日本においても大きな反響があった。

この本が出版されるまでは、語り部といわれる人が選ばれ、そして、語り部としての訓練を受けた者が、部族に伝わって来たストーリーを語り継いで行く。文字という手段によらないために、長い年月の間にその内容が変質してきたのではないかという批判も当然ある。伝言ゲームを考えてみれば、いかに口頭による伝言が不安定であるかは容易に予想できる。しかし、語り部というのは誰でもがなれるものではなく、しかも、幼い頃から、特別の訓練を受けていくのである。

口承文学、神話類型に対して、どのような態度で接するかは、研究者の考え方によってかなりの個人差がある。神話とは絵空事であって、歴史的事実とは全く異なっていると考える立場もあれば、反対に、すべて事実であると考える立場もある。聖書においても、一字一句すべて真実と解釈する立場もあれば、ある部分はメタファーであると考えられる立場があることも、それぞれの「信仰」によって、かなり異なってくる。

日本においては、東京大学の故大林太良氏を始めとして、世界の神話を比較神話学の視点から、共通項を探っていく動きがある。その一方、神話は、単なる作り話として、学問対象とはしない考えもある。例えば、日本の『古事記』に対しては、戦後においては偽書説が主流を始めていた。その根拠の一つとして『古事記』を編纂し、序文を書いたといわれる太安万

侶の存在が疑問視されていたからである。実在の人物ではないともされていた時期があったが、その墓が発見されたことにより、大きく流れは変わってくる。敗戦により、戦前の価値観はすべて否定していくという流れが変化した瞬間でもあった。中国にもキリスト教は伝わっていなかったという「定説」を覆したのも、西安郊外の大秦景教流行碑の発掘であった。

戦前においては、東京大学においてさえ、『古事記』を前に「いやさか」と全員で万歳をしてから、講義を受けたことを、伊勢流礼法を再興し、美学を専門とされた故山根章弘⁽⁴⁾翁から伺ったことがある。戦前には日本、東洋の科学的古代史研究のパイオニアである津田左右吉氏が聖典としても奉られていた『古事記』に対して、そして、当時のいわゆる「国家神道」の潮流に逆行する論陣を戦時中という環境の中で発言、発表していたことは、学者としては、使命感あるそして勇気ある研究姿勢であったと現代においては評価される所である。しかし、戦後、その流れを受けて、逆の反動として、『古事記』の評価に対して偽書という潮流に流れたことも、これまた、学問をするものとしては、批判を受けなければならない。

『古事記』が編纂されたのは、和銅5年(712年)であるが、当時ですら、すでに読まれることが少なくなり、江戸時代の後期に、本居宣長が一生をかけて研究し著名な『古事記伝』を世に問うまでは、神道家の間においてさえ、ほとんど、読まれる事はなかったのである。忘れ去られていた書物の一つであるといえるであろう。現在でも、ほとんど、読まれることは少ないのであるが、日本で現存最古とされている『古事記』をすべて否定することも、文字通りすべて事実とするというよりは、編纂者が、どのような意図で、何を読者にアピールしたいのかを読み取ろうと考えるべきであろう。

私自身は、現代版の『古事記』ともいえる『一万年の旅路』を読んで、非常な驚きと、壮大なロマンを感じた。科学的ではないという批判、あるいは、ネイティブアメリカンは、その名称が示しているように、他の大陸から渡ってきたのではなく、もともとアメリカに住んでいた⁽⁵⁾、という内部

からの痛烈な批判もある。しかし、1992年から開始された文部科学省(当時文部省)の「日本文化重点研究」のミトコンドリアDNAによる最新の科学の成果からすると、やはり、ポーラ・アンダーソン女史にどうやら軍配は上がりそうである。南アメリカに住んでいるインカの人々でさえ、アイヌ人とほぼ同一の塩基配列を示すことが明らかになってきている。⁽⁶⁾

『鳥葬の墓』あるいは『発想法』(KJ法)で著名な、文化人類学者の川喜多二郎氏が、筑波大学の最終講義の後で、若い学生達に向けて「日本人のルートはモンゴルにあると予想されるが、そのルートは北方ルートではないであろう。」「中国の文献の中に、そのような記述を見出すことはできない。それを実証していくのは君たちだ。」

文化人類学者は、かくありなんでしょうような、風貌と名調子で、日本人の起源説について、ご自分の推論を滔滔と展開されておられたことを、昨日のここのように思い起こす。学問の醍醐味とはこのようにして伝承されていくのではないかと、約25年経った今日でも、その一瞬一瞬を脳裏に再現することができる。

現在は、学際研究の成果により、日本人あるいは、ネイティブアメリカン、インカの民のルーツが、モンゴルという源流を更に超えて、人類の祖先が東アフリカにあることが、科学的な方法論によっても実証され始めている。比較文化という側面からも、アジア、アフリカに見られる文化的共通性と、気候風土によって形成される異質性(地域性)というものにも着目する必要がある。

文化人類学という比較的新しい学問体系は、古くはヨーロッパの宣教師達の報告にその萌芽を見ることができるが、学問的には、ポーランドのクラコフの学者マリノフスキーにその端を見ることができる。方法論としては、いわゆる「未開社会」⁽⁷⁾といわれる地域に生活をする事により、欧米社会には見られない文化類型を明らかにしていこうとするものであった。かのルース・ベネディクトの『菊と刀』も日本文化の型を、文化人類学の作法に基づき書かれた、日本研究の初期の研究と言える。

学問的、方法論ということになると、それぞれの学者が、自分の本来の分野を持っており、フィールドワークという共通の野外活動を通して、現地へ赴き、生活を共にして、その社会構造を文化的、宗教的に解明していく。ルーテル学院大学で毎年実施してきた、「日本の宗教風土」もこの延長線上にある。本からだけではわからないものが、足を運ぶことによって「何か」が見えてくる。なかなか見えて来ない場合には、苦痛を伴うのであるが、年数を積み重ねていくことで、それなりの「勘」が育成されていく。

今回の、タンザニアのフィールド調査は、私自身の今までの集大成に向っているといえる。比較文化の対象としても、アフリカという風土は、日本の宗教風土と対比をすることにより、互いに見えてくるものが多い。比較文化研究のまさに、宝庫であると言えるであろう。

1. 研究の動機

今回、本来、日本研究を主眼にしている者がアフリカ研究に手を染め始めた事に対して、その動機をまず、明らかにしておかなければならない。直接的には、2001年9月から2003年5月までアメリカのミネソタ州セントポールにあるルーサーセミナー（米国ルーテル神学校）に留学をさせていただいたことがまず、第一に挙げられるであろう。聖書、神学、比較宗教、教会音楽等を幅広く学ぶ一方、クロスカルチャーの部門に籍を置いていたので、フィールドワークが必須科目となっていた。初年度はネイティブアメリカンの居留区であるサウスダコタ州のパインリッジレザベーションのルーテル教会に2週間滞在した。

2年目は、特に必須条件ではなかったが、おそらく日本からはまず行くことはないであろう思われた地域であるタンザニアという国に目が行った。当時、このタンザニアという国の名前さえ、おそらく多くの日本人がそうであるように、どこにあり、どういう国なのかという基本的知識すらなかった。わかっている唯一のことは、アフリカの東にある国。そしてキリ

マンジャロが聳え立つ国ということくらいであった。

アフリカといえば、西欧列強の植民地支配にあえぎ、その上、奴隷貿易⁸⁾がそれ程遠くない現代にいたるまで行われていた地域である。私の大きな疑問は、そういう環境の中において、白人がもたらしたキリスト教が、急速に伸びているという事が、にわかに信じるができなかったのである。ネイティブアメリカンのように、白人に対して決して心を開くことなく「白人の宗教」そして「押し付けられたキリスト教」を受容しないというというのが、理解しやすい。本当に、彼らはキリスト教を心から受け入れているのだろうか。それとも、キリスト教を通して得られる「副産物（教育、医療等）に興味をむしろあるのではないのか」という素朴な疑問であった。

最終目的としては、この異文化研究を通して、私の研究テーマの大きな柱の一つである「日本に何故キリスト教が根付かないのか」ということを、比較文化の視点から、このアフリカ研究が、何らかのヒントを与えてくれるのではないかという期待を抱いたのであった。

（１）第一回タンザニアフィールドトリップ

初めてのタンザニアのフィールドトリップは、アメリカの留学先であるルーサーセミナーから有志が参加することになった。日本人の常識からは、全く信じる事ができないのであるが、ほとんど、無計画といってよい状態であった。引率の教授もエチオピアでの宣教体験はあるものの、タンザニアには行った事もない。直前になっても、一体、タンザニアのどこを訪問するのかもよくわからない。これが、フロンティア精神の一端であるのかもしれないが、「とにかく行ってみよう」「レッツゴー」という調子である。家族も同伴してよいとのこと！

さすがに、不安にかられ、タンザニアに行った事のある人達に相談すると、こちらの消極的になりそうな思いを超えて、タンザニアと聞いただけで、相手の顔色が明るくなり「是非、行くといいよ」と勧められる。こちらは、正直な所、家族も抱える身であるから、やはり怖くなって半ば以上、

行くのを断念しようと考え始めていたのであるが、誰に尋ねても「行くといいよ」と、同じ答えが返ってくるだけであった。

(2) 小山晃佑先生

最終的に、タンザニア行きを決意したのは、指導教授を引き受けてくださった小山晃佑（ニューヨークユニオン神学校）名誉教授による所が大きい。即答で、「それはいい」「アフリカと日本の相性は良い」という事で、私の躊躇する気持ちも固まった。予防注射もようやくクリニックの予約が出来、大袈裟ではあるが、宇宙旅行にでも行くような覚悟で、さまざまな準備を進めていった。

本題のタンザニアのキリスト教を論じる前に、どうしても小山先生のことについては、触れておかなければならない。日本では「神の痛み」の世界的な神学者である北森嘉蔵氏のように知られてはいないが、アメリカでは、百人の神学者の一人に数えられるスーパースターの存在である。代表的な著作としては、Water Buffalo Theology（水牛神学）で全米のみならず、世界中に広くその名を知られている。日本の大学ではなく、タイをスタートとして、シンガポールや、ニュージーランド等での教育、宣教体験、そして、神学校の名門中の名門である、ニューヨークのユニオン神学校に招かれ、16年にわたって、エキュメニズム関連の科目を担当された。現在は、引退されてはいるが、講演、講義等で相変わらず精力的に活動、研究を続けていらっしゃる。⁽⁹⁾

驚いたことに、訪問したタンザニアのルーテル系総合大学のツマイニ（Tumaini）大学の神学校生が「おまえは、小山博士の本を読んだことがあるか」と質問してきたことである。大変な尊敬をもたれていることがわかった。デンマークの教授が水牛神学をクラスで紹介をして、それ以降、そのデンマークの教授は、学生の間で「コヤマ」と呼ばれているようだ。

数ある著作の中で、Mount Fuji and Mount Sinai⁽¹⁰⁾をルーサーセミナーの図書館で借り拝読することにした。第二次世界大戦の最終局面にお

いて、B29の東京空爆の中で、旧約聖書を読み、そして洗礼を受けた体験を書かれておられ、驚きを覚えた。当時「敵国の宗教」であったキリスト教の聖典としての聖書を読み、しかも、旧約聖書を読み、キリスト教に入っていくということは、平均的な日本人の常識、発想では考えることのできないし、その時「何か」が働いていたとしか考えることができない。

中国のキリスト教を研究しておられたポール・マーティンソン教授の紹介で、また、クロスカルチャー部門の責任者であった、ロッド・メーカー教授が仲介をしてくださり、こうして、高名な小山晃佑先生にお目にかかることになった。第一回はルーサーセミナーのオルソンキャンパスセンターに足を運んでいただき、その後は、先生のご自宅に毎週伺うことになった。対話を中心として、2時間から3時間、いろいろなお話を伺うことができた。神学的なことについても、日頃、不明であったことをお尋ねして、いつも、見事にしかも、平易な言葉で説明をしてくださった。私はこの平易であるという事が、日本のキリスト教の世界においてもっとも重要なことの一つであると感している。

大学院を卒業して、ある一定以上の教育を受けている者でも、キリスト教神学を理解する事は並大抵のことではない。十字架に掛かれたイエス様は、このような難しい教えを説かれたのであろうか。教えの対象であったのは、むしろ字もろくに読むことができない大衆だったのではないか。小山先生の言葉は非常に明快で、しかも、初学者にもわかりやすいものであった。むしろ、その背後には、想像を超える学びがあったと思われる。キリスト教だけでなく、豊富な仏教関連の蔵書を持っておられるので、必要に応じて、本を書斎から持ってきてくださった。宗教間対話ということでは、イスラム教に関する資料もお持ちで、勉強のために貴重な本をお貸しいただいた。

戦後の焼け野原の中を、北森先生の『神の痛みの神学』⁽¹¹⁾の原稿を出版社に運び、その駄賃として焼き芋をいただいたという逸話を親しくご本人の口から伺ったときは、現代の日本、高度成長の最中に育った者には、不思議ではあるが、ある種のノスタルジーを強烈な印象と共に感じた次第である。

アメリカの留学期間の後半は、毎週、先生の本ネアポリスのご自宅を訪問して、インディペンデントスタディが出来たことは、私にとって、大きな無形の財産となっている。英語だけではなく、日本語の文献も非常に豊富に蔵しておられ、比較宗教あるいは、エキュメニズムの観点から、キリスト教を研究されていらっしやった。この背景として、東京神学大学をご卒業後、プリンストン神学校大学院で博士号を取得され（ルターの研究）、仏教国であるタイに宣教師として赴かれ、ご夫人と共に、神学校、教会設立に尽力をされたことが先生のユニークなアジアの神学としての、水牛神学を展開していくことになった。Water buffalo theology（水牛神学）も、この体験なしには執筆される事はなかったであろう。新版の、特に第三章 Gun and Ointment（銃と塗油）には、特に感銘を受けた。

The West has meant and is *both* threat and salvation for Asia. Asia's experience of the "gun and ointment" has aroused an active sense of participation in history among its peoples and its nations' leaders.⁽¹²⁾

（試訳）

西洋は、アジアにとって、脅威であると同時に癒しでもあった。この「銃と塗油」を経験したアジアは、そこに住む人々と指導者達に、積極的に歴史に関わるという意識を喚起してきたのである。

また、

Study with respect the other great historic faiths, civilizations, cultures, of contemporary Asia. This is a Christian engagement. It is an authentic part of education for being missionaries in today's Asia. It is important to know that religious syncretic situations.⁽¹³⁾

（試訳）

現代のアジアの伝統的信仰、文明、文化を尊重することを学ぶ事。このことは、キリスト教が関わるべきことである。今日のアジアにおいて、宣教師としていかにあるべきかということを経験する際、核となる部分でもあります。宗教的混交を知ることは大切なことなのです。

西洋は、アジアにとって、まさに「銃(武力)と塗油(癒し)」であった。このことは、多くの日本人が頭にあることではないだろうか。軍隊と、キリスト教というのは、本来結びつきにくいものであるが、16世紀の大航海時代においては、アジア、南北アメリカ、そしてアフリカにおいて全地球的規模で「銃(武力)と塗油(癒し)」が展開していた。コロンブスのアメリカ「発見」後、真剣に「インディアン」が人間であるのか否かということが、論じられていたのである。人間であるとするならば、改宗させる必要があったし、そうではないということになれば、奴隷として家畜と同様に使用しても良いと考える人も出てくるのである。1960年代のアメリカにおける公民権運動にいたるまで、あるいは、今日でさえ、完全に差別意識がなくなっているとは言えない。しかし、アメリカも単純な社会ではなく、いわゆる「サラダボール」の社会であるから、いろいろな考えを持つ人がある事も指摘しておかなければならない。南部の奴隷解放のために働いた人もいるし、アフリカの奴隷貿易に対して、それを解消しようと努力した人々もいた。

2. タンザニアの歴史的背景

タンザニアの宗教事情を論ずる前に、まず、前提としての歴史的背景を概観する必要がある。アフリカが世界の歴史の舞台に乗ってくるのは、カルタゴ、エジプト、あるいはエチオピアなどの北アフリカの例を除いて、比較的新しいものである。人類発祥の地であるはずなのに、歴史の舞台に出てこないというのは、ひとえに、歴史が、主として口承によって伝達されてきたことに、一つの原因を見出すことができる。歴史、文明という概念は、文字文化を有する文化圏が「記録」という一つの手段によって形成されてきたものと私は理解している。更に付言するならば、「勝者」「強いもの」の記録である。⁽¹⁴⁾

日本の、縄文時代も、三内丸山遺跡や、上の原遺跡など、各地の発掘調

査が進むにつけ、従来考えられていた世界よりも、もっと進んだ文化を有していたことがわかってきている。残念ながら、文字という「記録」がなされていないために、詳細は、今となっては、推測をすることしかできないのは残念な事ではある。

約1万年前から紀元前3世紀ぐらいまでを「縄文時代」と便宜的に呼んでいるが、この数千年の出来事は、現代の我々は、憶測でしかはかり知ることが出来ないのである。いくつかの特徴は指摘されている。その中でも、彼らが、単に漁撈採集のプリミティブな生活ではなく、植林、稲作にも関わっていた事が、発掘調査によって推定される所である。しかし、最大の特徴は、発掘される骨が、ほとんど無傷であるということである。大きな争いがなく、比較的安定した社会を数千年に渡って維持していたとはいわゆる有史以降の人類の歴史的常識から見ると驚くべきことである。後期縄文時代になって、弥生時代に近づいてくると、戦いによる骨の欠損や、弓矢でさされた状態での遺骨も出てくるのであるが、それまでは、かなり長期にわたって安定した平和な時代が続いたようである。

アフリカ、特にサブサハラ（サハラ以南のアフリカ）においては、歴史の実態というのは、まずヨーロッパ諸国の宣教師達が、大航海時代にアフリカに上陸するまで、ほとんど知られていない。東アフリカはアラビアの支配下にあった時期もあり、その奴隷としてのマーケットがあったのであるが、彼らの文化、宗教に関してはほとんど関心は払われていない。文献としての記録がなされるのは、19世紀の半ばになってからである。

(1) タンザニアとドイツの関係について

タンザニア国立博物館の調査によると、最初のドイツ人がザンジバルを訪問したのは、1884年の1月7日という記録が残っている。⁽¹⁵⁾ 先行してすでにイギリスや、アメリカもすでに来訪していたのであるが、当時の実権はアラビアのスルタンの支配下にあった。スルタンの最大の関心事は、ヨーロッパとの交易にあった。したがって、キリシタン時代の初期の日本

でもそうであったように、欧米諸国は、為政者から大変な歓待を受けている事が報告されている。⁽¹⁶⁾ 例えば、天草五大名の一人であった志岐氏も、豊臣秀吉の九州遠征によって滅亡されるまで、切支丹大名として君臨していたが、キリスト教信仰というよりは、むしろ、ヨーロッパとの交易に主眼があったとも考えられている。⁽¹⁷⁾

ドイツ人が、何を目的としてザンジバルを訪れたのかについては、記録が残っていない。しかし、同年の3月にはザンジバルから現在のケニアのモンバサへ向ったと記されている。スルタンからの紹介状を持ったこのドイツ人は、クラッフ博士(Dr. Krapf)であると思われる。クラッフ博士は、1810年にドイツのチュービンゲン近郊で生を受け、神学を学んだ人物である。アラビアの支配下にあった東アフリカ、特にザンジバルにとっては皮肉なことであるが、彼は全世界を神のもとに改宗することを志していた。1837年にはすでにエチオピアに宣教師として入国している。後に白人としては、キリマンジャロを初めて見たとされているヨハネス・レップマン(Johannes Rebmann)も、彼の宣教の仕事を手伝うことになる。

宣教師に引き続いてやってきたのは、商人達であった。日本がアメリカと日米修好通商条約を締結した年と偶然重なるのであるが、1859年6月にスルタンのマジッド(Majid)とドイツのハンブルグ、ブレーメン、リューベックの諸都市が通商協定を締結している。その後、ザンジバルはアメリカ合衆国、イギリス、フランスと同様の協定を結ぶことになる。この協約は欧米側の資料であるので記されていないが、日本と同様不平等条約であったことは間違いない。後に、ザンジバルを支配していたスルタンを除外して、次々に領土に関する条約が締結されていくことになる。

宣教師、商人の次にやってきたのは、探険家達であった。アフリカといっても沿海地方だけが、ようやく知られるところとなっていくのであるが、内陸部は依然「暗黒大陸」のまま、ヴェールに覆われたままであった。イギリスの宣教師であり、探検家としても著名なリヴィングストンは、すでに1841年からアフリカ奥地の探検を開始していたが、ドイツは後発組とし

て、1858年9月にアルブレヒト・ロスヒャー(Albrecht Roscher)が、ピッキオリ(Piccioli)号に乗船してザンジバルに到着し、地理学の視点から、内陸部の探検の必要性を感じ、準備を進めていたのである。そして、このザンジバルこそが、その出発点として相応しいと結論付けていた。これには、大きく分けて二つの要因があると思われる。まず、商人達がザンジバルで基盤を作っていたので、探検のための準備には事欠かなかった。次に、熱帯地方でありながら、比較的過ごしやすい風土であったので、体を順応させるには都合が良かったと考えられる。更に、植民地支配という点において先行していたイギリスや、あるいはスルタンも、海浜のロケーションで最上のご馳走でもてなしている。⁽¹⁸⁾

リヴィングストンのわずか2ヵ月後には、ロスヒャーは内陸部の湖の一つ、ニャサ湖(Lake Nyasa)に到達している。しかし、当時はマラリヤに対する予防、治療法がなかったために、1860年7月に、キスングニ(Kisunguni)という所で亡くなったことが、記録に残されている。⁽¹⁹⁾

(2) マジマジ紛争「黒いナポレオン」⁽²⁰⁾

今回フィールド調査を実施した、へへ部族の住んでいるタンザニア西南部の高原地帯では、ムクワワ(Mkwawa)という首長が支配していた地域であった。ムクワワはアフリカの王の中でも最も強大な王と言われており、その強さにより、ムクワワは「黒いナポレオン」と呼ばれていたのである。呪術的な力も利用したと言われていた彼の姿を見たことのある白人はいなかった。彼の前には、さしもの近代装備を誇るドイツ陸軍も敗走させられている。1881年9月13日、東アフリカのドイツ軍はその敗戦の電報をベルリンに送っている。すなわち、ゼレウスキー(Zelewski)率いる部隊が、へへ族の襲撃により全滅したという内容であった。約10人のヨーロッパ人、300人のアフリカ兵が人質となり、そして、300丁のライフル、すべての砲弾、2台の大砲、2台のマシンガンが奪われたのである。原始的な兵器しか持たないわずか2000人のへへ族の戦士に完膚なきまでに打ち負かされた

のである。へへ族の勇士が使用したのは、主として投槍、毒矢であった。最初のドイツ軍による、へへ族攻略はこうして失敗に終わった。偉大な王ムクワワを撃退するには、もっと兵力が必要であった。

更に1892年、ムクワワ王にとって最も重要な拠点であったムコンドア(Mukondoa)の近くのドイツの隊商を攻撃する。これに対して、ドイツ軍は1894年に報復に出た。同年10月30日、ムコンドアの町はあえなく陥落した。ムクワワ王は多くの兵器を携えて脱出するのであるが、正気を失ってしまったのか、彼の軍のわずかに三分の一にしか、銃を渡さず、しかも火薬を入れずに弾丸だけを装填させたという。今まで成功していたゲリラ戦もしなかったのは、全く理解に苦しむ行動であった。こうして、ムクワワ軍は破れ、王には五千ルピー(約二千ドル)の懸賞金が懸けられた。1897年、王の弟であるムパンギレ(Mupangile)は拘束され、軍法会議の結果、絞首刑に処せられる。へへ族の女、子供達は人質となり、他の部族の住む地域に連れて行かれた。

1898年7月22日の、クールマン(Kuhlmann)中尉の歩兵中隊に所属し、ドイツの参謀長であったメルクル(Merkel)の報告書の中にムクワワ王の最期が記録として残っている。それによると、7月14日に、ムクワワは4人の息子たちと、彼に最後まで従った妻と潜んでいるという情報が入った。そこで、ドイツ軍に所属するアフリカの現地人15人とへへ族数人がただちに派遣されることになった。7月19日、隠れ家に潜んでいた4番目の息子がまず、拘束された。隠れ家から銃声が鳴り響き、すでに病に侵されていたムクワワは、最後まで彼に従った家来に自らを撃たせ、残った息子も、すぐその後を追ったのである。

メルクルは、躊躇しているへへ族に、彼の首を切るように命じた。そして、その首はイリングに運ばれた。1898年7月21日、ムクワワ王の首は、イリングの村で曝されることになった。この日は今日においても、「記念日」として毎年行事が催されるそうである。

ムクワワの最期は、植民地主義への抵抗の最後でもあった。ドイツはそ

の後、東アフリカにおける権益を確保し、税金を徴収し始めた。しかし、税金という概念がなかった民にはなかなか理解することができなかったようで、各地で反乱、蜂起が相次ぐが、「黒いナポレオン」ムクワワ王以降は、1961年に独立を成し遂げるまで、西欧列強にもはや抗する事はできなかったのである。

(3) タンザニアの国境の形成と生活

国際関係を論ずる場合、留意しなくてはならないことがある。近代において、特に産業革命以降、あらゆる今日の学問類型は欧米諸国で最も進化したことは、疑うことの出来ない事実である。神学にしても、同様の事がいえるであろう。アジア、アフリカの優秀な学生は、ヨーロッパ、あるいはアメリカに留学して、その「進んだ」学問を持ち帰ってくる。日本においても、開国以来、明治の指導者の多くは、外国で学び、その成果を日本にもたらした。この報告書においては、その是非は問うことは目的としていない。ただ、ここで、国際関係を論ずる場合の大前提として、国境の問題を指摘しておきたい。

世界地図を目の前に置いたとき、不思議な感覚にとらわれてしまう。この国境とは、一体何なのであろうか。国と国とを分け隔てる線。この線は、いかなる影響を人類の歴史の与えてきたのであろうか。ネイティブアメリカンそしてタンザニアの人々には、この国境という概念が存在しなかった。白人がフロンティアを形成していた時、ある時、柵を作り始め、「自分の所有の土地」としていたことを理解することができなかった。土地は、神が与え賜うたものであり、人間が所有すべきものではない。その神の領域に人間は住まわせてもらっているのである。決して所有権を主張すべき対象ではない。

タンザニアとケニアの国境地域におけるマサイ族も同様である。彼らには、国境意識というものはない。現代社会においても、頑として西洋化を拒み、昔ながらの伝統的生活スタイルを変えようとしない。「世界の牛はマ

サイのもの」という「信仰」に生き、牧畜を生業として牛の行くところは、彼らもどこにでも行くのである。それが、たまたまケニアであったり、タンザニアであるにすぎない。家も土で作った簡素なもので、電気も無い。「不便か」と聞かれても、「暗くなったら寝る。明るくなったら起きる」という答えが返ってくるだけである。思えば世界もエジソンが電気を発明するまで、相当長い年月を我々はローソク、松明等に頼って生活をしていたのである。モーツァルトの時代ですら、夜のコンサートで、照明を確保することが、大きな課題であった。ホールのレンタル代の大部分はローソクの使用代でもあった。

産業革命は人類に多大な貢献をすると同時に、次なる大きな課題をも残したのである。それは、エネルギーの確保である。このエネルギー使用量は1950年代を境として、天文学的数字にまで消費量は増加していくのである。この深刻な課題に対して人類はいかに取り組んでいくかは、政策科学、政治学の領域となる、と同時に、一人一人が取り組まなくてはならない課題であろう。

タンザニアは、GNP ベースで行くと、最貧国の一つとして計上される。平均月収も、50ドル代であるという。⁽²¹⁾ 1961年12月9日まず、タンガニカとして独立をして、経済成長という視点からは、全く世界に取り残されてしまった観がある。しかし、経済学においては、数字が大ききものをいうのであるが、文化人類学からは別の視点の理解が可能となってくる。経済学も現在では細分化され「富」という概念も一元的には捉えない立場も出てきているようではあるが、社会科学の領域の学問としては、いかに数値化するかという事が、重要になってくる。

現在、国境の概念を超えてきたものは、多国籍企業と、NGOがその例としてあげられる。便宜的、あるいは、政略的に決定されてきたこの国境概念はどの地域においても紛争の種となる。

タンザニアの首都機能を担うダーエスサラームは、広く「平和の港（聖域）」The Harbour (or Haven) of Peaceとして、知られている。語源的に

は、アラビア語のBandar-ul-Salaamから来ている。スワヒリ語では、Bandariya Salama と表記される。⁽²²⁾ 歴史的には、1860年代には、Dar Salaam と表記されており、平和の家 the House (or Abode) of Peace (or Salvation) とともに記されている。⁽²³⁾ その一方で、1880年代に、スワヒリ語でDari Salama が、ザンジバールのスルタンであったマジッドMajidによって採用されたという説もある。かつては、一漁村であった港が、そして、ケニアとタンザニアの国境問題が、はるかかなたのベルリン、ロンドンの会議で議論されることになる。1890年7月1日の後に、ヘリゴランド-ザンジバル条約により、領土に関する合意がイギリスとドイツの間でなされるのである。⁽²⁴⁾

3 . アフリカの伝統宗教と『古事記』と聖書

アフリカにおいて、全般に共通して見られる宇宙観は、この宇宙が神によって創造されたということである。この点において、聖書の世界観と同じ土俵に立っているといえるであろう。一方、日本においては『古事記』においては、

天地(あめつち)初めて發(ひら)けし時、高天(たかま)の原に成れる神の名は、天之御中主神。次に高御産巢日神。次に神産巢日神。この三柱の神は、みな獨神(ひとりがみ)と成りまして、身を隠したまひき。⁽²⁵⁾

と、なっていることとは対照的である。聖書の創世記と比較してみよう。

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた「光あれ。」こうして、光があった。(創世記1:1-3)

一方、中国の老荘思想⁽²⁶⁾、易経⁽²⁷⁾の影響を強く受けている『古事記』序文においては、

混元既に凝(こ)りて、氣象未だ効(あらは)れず。名も無く為(わざ)も無し。誰かその形を知らむ。然れども、乾坤(けんこん)初めて分かれて、參神造化の首(はじめ)となり、陰陽ここに開けて、二靈群品の祖(おや)となりき。

この報告では、聖書と『古事記』の釈義について詳細に比較することはしない。ここで、強調したいことの一点は、アフリカにおいては、神は創造主と同義として使われていることが多いということである。この点において、アフリカの宇宙観は、必然的に旧約聖書、あるいはメソポタミアの神話群と共通点を見出すことができるということである。

その一方、雷、嵐、日食、月の満ち欠け、流れ星などなど、自然現象を宇宙の天あるいは神に関係する出来事として把握している。その点においては、アフリカの伝統宗教は、日本の神話と共通する部分も多いのであるが、大きな違いとして、創造神が存在することであろう。『古事記』におけるいわゆる造化三神も、この創造神と把握できなくはないが、超越的な絶対神ではない。キリスト教においても、神のご性質において、内在神と超越神との間で議論がさまざまである。しかし、私はどちらのベクトルに完全に偏るということも現実的ではないと思っている。仏教のいわゆる禅問答的になりかねないが、内在神であり、超越神であるというのが、一般の日本人には却って、理解しやすいように思う。少なくとも、私にとってはそのように理解することによって、バランスを保ちうる。アフリカのキリスト教徒は、神に関しては、このバランスがよく取れているという印象を持っている。

4．タンザニアのキリスト教

タンザニアは1980年代までは、キリスト教とイスラム教、そして伝統的宗教が他のアフリカの地域とは異なり、争いがほとんどなく、調和して共棲していたと言われている。今日でも、一部の過激なイスラムの原理主義を除いては、比較的、その調和は続いているように思う。⁽²⁸⁾

これは、タンザニアの地理的条件が大きく影響しているのではないかと、私は推測をしている。アフリカの地図を机上に置き、鳥瞰すると、タンザニアは北はキリマンジャロ、そして西、南の国境は、ほとんど、広大なヴィクトリア湖、タンガニーカ湖等によって囲まれている。特に西の紛争多発地域から、隔離されているということは、紛争がタンザニア内部にまで波及しにくいのではないかと予測できる。もう一つ大きな要因は、隣国のケニアのように特に強力な部族が対立していないということもあげられよう。120を超える部族が存在すると言われているが、その中で際立って強力な、政治的野心を有している部族は見当たらない。

マサイ族は、アフリカ全土からも際立った存在として一目置かれているグループであるが、彼らの最大の関心事は遊牧にある。「世界の牛はマサイに与えられた」という信仰のもと、彼らは、牛と共にどこにでも移動する。彼らには国境という概念が存在しないようである。現在でも、広大な自然公園の中に、マサイだけは悠然と歩いている。西洋化を頑として拒んできた彼らであったが、マサイも、他の部族に続いて、クリスチャンになってきている。他の部族と大きく異なることは、精神的支柱としてのメディスンマン（呪術師）が、天からの声を聞き、それが、イエス様であったという。メディスンマンが、アメリカの宣教師から洗礼を受けたことにより、一気にマサイクリスチャンが誕生することになっていったのである。キリマンジャロ地域のアルーシャのダイオシス（ルーテル教会の教区）では、マサイのビショップが誕生している。1998年のタンザニアルーテル教会の報告では、67人の牧師と382,534人の教会員がいる。単純に計算すれば、牧師一人当たり約5,709人の信徒の割合ということになる。同じく1998年の統計では、タンザニア全体では、20のダイオシスと1,247人の牧師と1,797,417人の信徒がいる。⁽²⁹⁾

今回のフィールド調査では、ドイツ軍と戦った、南西部の平均海拔が千メートル以上のハイランド地域に居住する比較的大きい部族であるへへ族の人々の中に調査に入ったが、一緒に生活を共にして、基本的には好戦性

は全く見出すことはできなかった。農耕を主体として、平和に暮らしているという印象である。

また、タンザニア全体において、部族間のインターマリッジが進んでおり、顔や体系等の身体的特徴からは、部族の区別をすることは、現地の人にも難しくなっている。部族の言葉によって、その出自が区別できるようだ。タンザニアの基本的方針として、統一ということを最優先に考えてきたので、言語政策としても、初等教育ではスワヒリ語が必須であり、すべての国民がスワヒリ語によってコミュニケーションができることも、部族間の共存のためには大きな役割を果たしてきたようだ。

欧米の宣教師の言語政策においてもスワヒリ語がまず、聖書の翻訳対象として選ばれた。最初の体系的スワヒリ語文法は1850年にヨハン・ルードヴィッヒ・クラッフ(Johann Ludwig Krapf)によって出版されている。彼は、スワヒリ辞典の序文に「宣教師には、まず最初に一つないし二つの福音書を現地語であるスワヒリ語で訳することを勧める」⁽³⁰⁾と記している。

キリスト教、イスラム教、そして伝統的宗教はそれぞれ、タンザニアの国民を3等分していると言われている。しかし実のところ正確な統計は不明である。イスラム側は、国民の半数以上がムスリムであるとしているし、キリスト教側も同様の主張をしている。正確なデータを出すことは、政治的にも慎重にならざるをえない状況にある。これは、初代大統領ニエレレ氏がカトリック教徒であったが、宗教においては、平等に扱う方針を打ち立てていたものの、キリスト教、特にプロテスタント諸派は、教育に力を注いだので、必然的に人口の1、2パーセントしかない大学進学率の大半をクリスチャンが占め、政府の機関においてもクリスチャンの比率が高いという「不平等」な状況が長く続いた。しかし、1979年のイラン革命以降、この均衡は崩れてくるのである。このイスラム教徒の不平等感90パーセント以上がムスリムであるザンジバル島のイスラム圏への加入問題があった。また、湾岸戦争、イラクの攻撃以降は、不安定要因が増してきた事は事実である。しかし、その沿海部分のバガモヨという地域を訪問して、

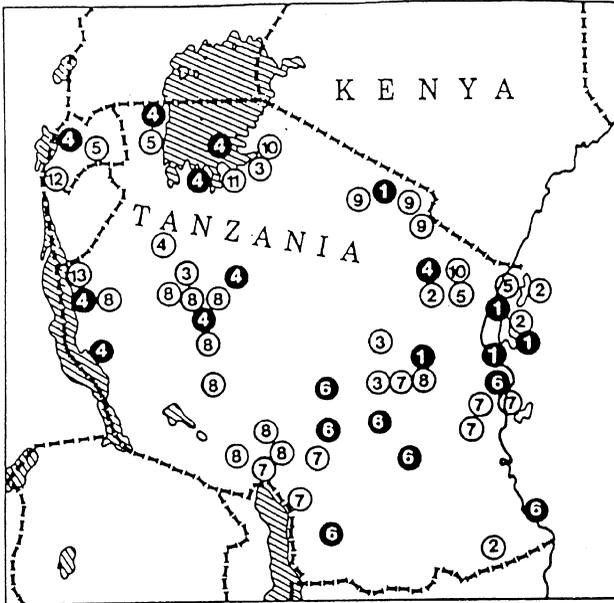
イスラム教徒と話をして感ずるのは、それでも相当に穏やかな人達である。植民地時代、そして、奴隷貿易の事に対しては「昔のことであって、それを、今言っても始まらないだろう」と逆に諭された。⁽³¹⁾

問題は、「外」からやってくる人達にあるようだ。現在のタンザニアには、日本と同様、さまざまなキリスト教諸派が入っている（図1，図2参照）。この中で、タンザニアのキリスト教の三分の二を占める、カトリック教会、そしてルーテル教会の目覚しい発展は注目すべきであろう。それと同時に、ペンテコステ派の台頭も著しい。リバイバル、カリスマティックなキリスト教の動向は、ルワンダに始まり、そしてタンザニアにも波及してきている。いわゆるバロコレBalokole運動である。罪の告白と赦し、そして新しい命と生活がその中心的な運動である。アフリカのクリスチャンがお酒を飲まないというのも、この運動の延長線上にあると考えられる。しかし、タンザニアにおいては、1960年代にその半数はルーテル教会のメンバーになっている。⁽³²⁾どの教派に所属するかは、その国の国民性による所が大きい。比較的「穏やかな」そして音楽を重視するルーテル教会はタンザニアの人々に受け入れられやすかったのかもしれない。

しかし、この点については、今後更に調査をして、何故ルーテル教会がタンザニアで急速に現在でも伸びているのかは研究していく必要がある。

MAPS

Areas of Missionary Influence before 1914



Scale: 1 : 10 000 000

The missions are numbered chronologically, according to the date when they started work on the mainland of German East Africa:

Catholic missions

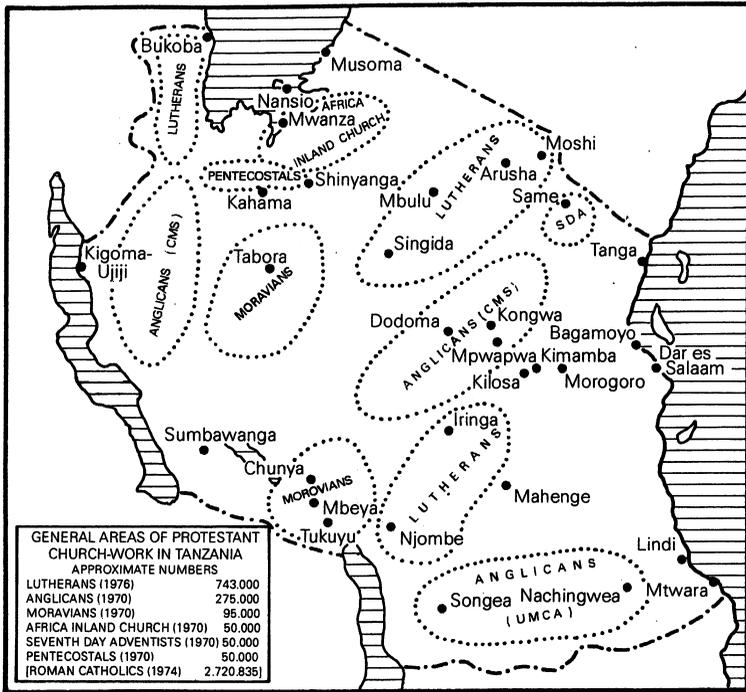
- 1. Holy Ghost Fathers 1868
- 4. White Fathers 1878 (+ Trappists 1898)
- 6. Benedictines 1889

Protestant missions

- 2. Universities' Mission to C. Afrika 1871
- 3. Church Missionary Society 1876
- 5. Berlin III 1887 (+ Afrika Verein 1896)
- 7. Berlin I 1891
- 8. Moravians 1891
- 9. Leipzig Lutherans 1893
- 10. 7th Day Adventists 1903
- 11. American Inland Mission 1910
- 12. Neukirchen 1911
- 13. Brecklumer 1912

Source: Anne Brumfit, "The Rise and Development of a Language Policy in German East Africa", *Sprache und Geschichte in Afrika* (2/1980), p. 285.

Areas of Protestant Church Work in Tanzania, 1975



Sources: Conference and Training Centre CCT, Dodoma, 1970; Catholic Directory of Eastern Africa, 4th Edition, Tabora, 1974; Kiwovele/Mellinghoff (eds.), Lutherische Kirche Tanzania, Erlangen, 1976, 154.

N.B.: In some areas and large towns several denominations may have Churches. Roman Catholics are found in almost all areas.

Statistics vary according to the sources and years of estimations.

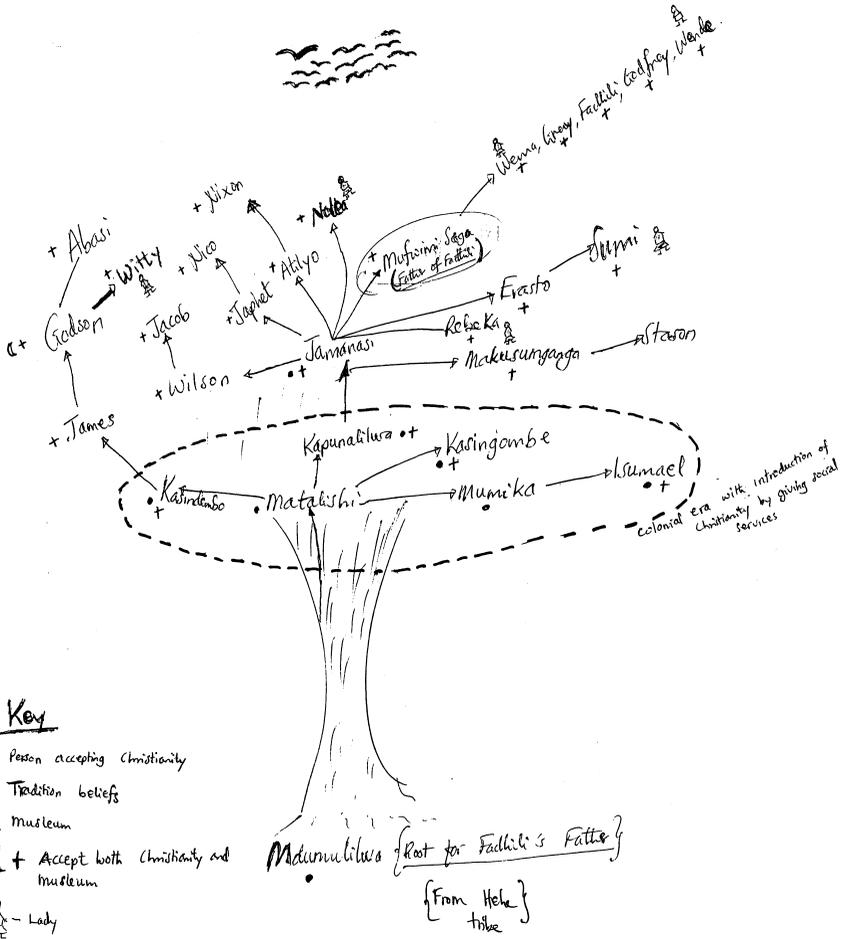
Source: J.P. van Bergen, *Development and Religion in Tanzania* (Madras, Leiden, 1981), p. 35

5．大地と人々の生活に根ざしたキリスト教

主として北半球の世界が作り上げてきたキリスト教は、確かに素晴らしい。しかし、南半球の一つであるタンザニアのキリスト教の中に入って感ずるのは、大地に根ざした信仰。そして、生活の隅々にまで浸透しているキリスト教信仰。ここには「サンデークリスチャン」は存在しない。一日が祈りに始まり祈りに終わる。

神不在の理論構築には、喜びどころか、他者を切り捨ててしまう「冷たさ」がある。タンザニアのキリスト教にはこの「冷たさ」あるいは「冷酷さ」が感じられない。神社神道が形成される前から存在する古神道にも、この「冷たさ」がない。むしろ、「おおらかさ」があり、笑いがある。理論らしいものはないかもしれない。しかし、空っぽというわけではない。

門脇佳吉氏が、「日本のキリスト教は古神道を学ぶことによって生まれ変わらねばならない」⁽³³⁾と書かれたのには、こういう背景があるのかもしれない。⁽³⁴⁾古神道は、日本という風土に住んでいるがゆえに逆にわかりにくい側面がある。しかし、タンザニアは、伝統的宗教の長い伝統の上に、キリスト教がある。一見、伝統宗教を置き去りに、そして、キリスト教に「改宗」しているかのように見えるが、その実、底流には何万年と培われてきた、伝承が豊かな土壌としてあることを見逃してはならないであろう。アフリカ独立教会は、このような伝統の上に形成されつつある。



今回、すべてのフィールド調査に同行してくれたへへ族のサガ氏に一族の家系図を描いていただいた(図3)。文字通りファミリーツリーで、大きな木として記憶をもとに、5世代前の所まで遡ってくれた。点線部分はドイツの植民地支配の中の事である。そして、この時代には、キリスト教と伝統宗教の混交が見られる。そして、植民地時代以降、伝統宗教に戻ることなく、ほとんどの家族がクリスチャンになっていることがわかる。この一家族だけでも、これだけの広がりを見せているのであるから、キリスト教が大きく躍進するのもうなずける。同様にイスラム教の家庭を調べたら同様のことがいえるのかもしれない。

エコロジーという言葉は、現在、地球温暖化という地球規模の深刻な緊急に取り組まなければならない課題である。キリスト教は、今後この課題にどのように関わっていくのか。自然を「モノ」として開発の対象、あるいは人類の富のために無分別に使ってきた態度は、改められなくてはならない。北アメリカのネイティブアメリカン、南アメリカのインディオ、オーストラリアの原住民であるアボリジニ、日本のアイヌの多くは、キリスト教を自分たちの宗教としては、受容しなかった。一部、強制され改宗させられた時代もあった。これに対して、タンザニアの人々は、キリスト教を、自分たちの宗教として真に受容している。一人のアメリカの宣教師が「私たち白人によってキリスト教は、アフリカに種が蒔かれたが、今は、彼らから学ばなくてはならない」とつぶやいていた。なぜ彼らは、喜びに満ち溢れ、生活しているのか。

アフリカといえば、貧しい、エイズ、紛争と悪いイメージしか我々日本人は持っていないのが普通かもしれない。そして、「何かをしてやらなければ」という発想がある。とんでもないことである。彼らからこそ、学ぶ事はたくさんある。湾岸戦争、そしてイラクへの攻撃により、アフリカにおける宗教事情もこれから大きく変化している。第一回の訪問の時は、アメリカ人はモスクに行くことはできなかったが、日本人の私だけが、許された。しかし、イラク戦争後の第二回目の今回の調査では、モスクを見学す

ることは、断られた。イマーム（イスラム教の礼拝における導師）が、内部を見られることを恐れたためのようだ。我々は、イスラム教徒を西欧流の一方的な偏見でしか見ていない。イスラム研究のほとんどは、欧米のキリスト教圏の学者によって、批判的になされてきた。そして、そのゴールはキリスト教の優位性を明らかにせんとするためであることが多い。しかし、これは、学問的に公平な立場とは言えない。イスラムの人々からすると、欧米のキリスト教は「こわい」のである。歴史的にも、十字軍、魔女狩り、宗教裁判、三十年戦争などなど、そして現代になっても「こわい」歴史は続いているのである。

「剣を取る者は皆、剣で滅びる」(マタイ 26 : 52)

ジャストウォー（正義の戦争）の論争がアメリカの神学の中にある。しかし、キリストの道からは、そのような考え方は、一体どのようにして出てくるのであろうか。私の理解を超えている。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(マタイ 5 : 44)は、究極的なキリストの道ではないのか。今日、世界のいたる所で行われている矛盾に、いかにキリスト者は応えるのか。

現代のアフリカには、第二の（宗教的）植民地の萌芽がある。19世紀から20世紀にかけて、帝国主義の嵐が、アフリカを蹂躪した。今度は、世界の三大宗教の二つが勢力拡大に躍起になっている。タンザニアもその例にもれない。双方の宗教的勢力が、戦略的にしのぎを削っている。特に湾岸戦争後、そしてイラク攻撃以降、イスラム教も南下し、また内陸部に伸びる国道沿いに新しいモスクを次々に立て始めている。オイルマネーをふんだんに使用してのモスク建立。そして、アメリカの富を背景とした過激なプロテスタンティズムの台頭。「クルセード（十字軍）」という標語がアフリカの街角を飾るようになってきた。

持続可能（サステイナブル）な発展ということが、経済のみならず、地

球環境の点からも、叫ばれてから久しい。マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」に関する社会学的研究を待つまでもなく、宗教と社会との関係は、本来的には無関係であると思われるものが、不可分であることは避けられない事実のようである。フィールド調査に協力してくれたファディリ・サガ氏は、植民地主義とキリスト教の関係については、否定しなかった。宣教師の働きが、直接的ではなかったにしろ、植民地支配の間接的要因になっていたと考えている。この点においても、今後、検証していく必要がある。

現在のアフリカのイスラム教とキリスト教の双方の急速な台頭は、背景にアラブ諸国とプロテスタントの大国であるアメリカが背景にある。本来的あるいは、本質的には「関係がない」と、結論付けたい所であるが、宗教もそれぞれの時代背景そして思想の影響からは、逃れることはできないということも否定できない事実である。

アフリカで、イスラム教が何故伸びるのかという理由の一つは、ビジネスチャンスの拡大という事があげられている。同様のことが、キリスト教にも当てはまるのかもしれない。特に、プロテスタントの急速な伸張はアメリカの「豊かさ」を背景としている。やはり「豊か」にはなりたいというのは、どこの国でも、同様のそして、疑うことのない基本的欲求のようである。日本がその例として、もっともふさわしく挙げることができるであろう。特に第二次世界大戦後は、アメリカ型の社会を目指し、構築してきた。そして、日本は確かに「豊か」になった。しかし、ここに二つの矛盾する視点がある。一つは、アメリカの若い宣教師が来日して教会を訪問して驚くことが「アメリカの教会とほとんど同じである」という感想、そしてもう一つとは、タンザニアの研究者が日本に初めて訪れて「日本の社会は、もっと欧米化していると思っていたが、実際はそうではなかった」と。この二つの感想は、それぞれの個人的な感想にすぎないのであるが、大きな示唆に富んでいることに気付かねばならない。

この報告が、「何故、日本にキリスト教が根付かないのか」というテーマ

を背景にしているという事を冒頭に述べた。そして、その解答に近づくことができるヒントが実はここにある。本来、古神道の世界に生きてきた者にとって、あるいは、多くの日本人にとっても同様の事が言えるのかもしてないが、日本の教会は、ネイティブアメリカンが未だにそうであるように「違和感」を感じずる所が多い空間であるということである。それに対してアフリカ、少なくともタンザニアのキリスト教、特に今回調査の対象としたイリングという高原地域のキリスト教は「違和感」の全く感じられない空間であったということである。同行した日本人の一人の感想が、タンザニアの山岳地帯の風景と、素朴な人々の暮らしぶりを見て、そこに日本人の心の原風景を垣間見たためであろうか、「アフリカに来ているのに、アフリカに来ているという実感がしないというのが、一番の驚きだ」と語っていたことに、やはり、多くの隠された、そして重要なヒントが内包されている。彼らの、伝統、文化、生き方を守りつつ、キリスト教が自然に生活の中にごく自然にある。

社会と宗教とは、切り離して考えることは難しいと述べたが、日々の生活において、命の糧である水を、井戸から汲んできて、そして一滴も無駄にしないように使う。体を洗うにも、洗面器に一杯の水を惜しんで使う。口を漱ぐにも、コップに半分の水で充分。そこに、水に対して、感謝の念を持つ。これは、一昔前の日本にも確かにあったことではないか。シャワーから文字通り、湯水のごとく、体を洗うことができる「豊かな」社会には、この感謝が希薄になってゆく。そして「恐れ」がなくなった。生活に根付かない宗教は、決して、人々の心には根付いてゆかない。そこには、感謝の念も、賛美の声も枯渇してしまうのである。タンザニアの村の教会は、トタン屋根の、雨漏りしそうな教会であるが、この賛美の声が満ち溢れている。そして、喜びがある。日々の生活に祈りがあり、感謝がある。そして聖書がある。「アフリカのエデン」といわれるゆえんがここにあるのではないだろうか。

あとがき

タンザニアという国は、不思議な国である。その大地を踏みしめているだけで、落ち着きを取り戻してくれる。この小論を書きながら、今までと大きく異なることが一つある。書きながらとにかく楽しいのである。論文を書くことは、ある程度「苦痛」を伴うことが往々にしてあるのだが、今回は、その苦しみが少ない。論文のための論文は書きたくないものであるが、タンザニアという国について論ずるときには、不思議といろいろなアイデアが次から次へと湧いてきて、書くスピードが追いつかない。江戸後期の戯作者、曲亭(滝沢)馬琴が、南総里見八犬伝を書いているときに、味わっていた感慨に近いものがあるかもしれない。馬琴に比して、文学的才の不足は、否定できないのであるが、「書きたい」という欲求は、馬琴に劣ることはない。論文というよりは、エッセイに近くなってしまった感があるが、フィールドワークの報告という性質上、自分が直接体験し、味わってきたことを記すとなるとどうしても、そのようなスタイルにならざるを得ない。帰国後、一ヶ月も経たない中で、録音したカセットテープや、手帳にメモをしたことも、まだ十分には活かしきってはいない。また、日本では、ほとんど先行研究がないことから、欧米諸国の文献に頼らざるをえなかったこともあり、資料の読み込みもまだまだ、これからの課題である。しかし、この報告に「タンザニア序説」と銘打ったのは、今後の研究に、大いに期待していただきたいという含みがある。とても、一人の力量では、なする事には限界があり、一生をかけたとしても、多くの事はできないかもしれない。この報告を読んだ方の中で関心を持った方がいれば共に研究をしていきたい。さまざまな分野の方が集まることを期待する。

(参考)

2004年12月16日 - 12月29日

タンザニアフィールドトリップ行程

- | | | |
|-----------|-------------|-------------------------|
| 12月16日(木) | 羽田発 (関西空港) | ドバイ経由 |
| 12月17日(金) | ダーエスサラーム | ルターハウス宿泊 |
| 12月18日(土) | モロゴロ地区 | フィールド調査(1) |
| 12月19日(日) | 同上地区 | フィールド調査(2) |
| 12月20日(月) | イリンガ地区 | フィールド調査(3) |
| 12月21日(火) | 同上地区 | フィールド調査(4)
ヘルスセンター訪問 |
| 12月22日(水) | 同上地区 | フィールド調査(5)
ツマイニ大学訪問 |
| 12月23日(木) | ルーアッ八国立公園 | 訪問 |
| 12月24日(金) | バガモヨ地区 | フィールド調査(6) |
| 12月25日(土) | 同上地区 | フィールド調査(7) |
| 12月26日(日) | 同上地区 | フィールド調査(8) |
| 12月27日(月) | ダーエスサラーム | ルターハウス宿泊 |
| 12月28日(火) | タンザニア発 | |
| 12月29日(水) | ドバイ経由(関西空港) | 羽田着 |

A Report of Tanzania

An Interdisciplinary Study of Religious Affairs in Tanzania

Toshifumi Uemura

Tanzania is said to be the Eden of Africa. It is a country where Christianity, Islam, and traditional African religions exist side by side in harmony. To probe the reasons why such a situation is possible, I made a month-long field trip in 2001 and a two-week field trip at the end of 2004. The first trip began from Luther Seminary in St. Paul, Minnesota, USA lasting from January 4 to February 3, 2001; it included visits Dar Es Salaam, Iringa, and Arusha as well as fellowship with Lutherans in local churches and at Tumaini University, an institution which receives support from Luther Seminary. Incidentally this private college welcomes students not only from Tanzania but throughout Africa. The Lutheran Church also works to support health services in Iringa and, through the establishment of a health center in Illura, contributes to the medical wellbeing of the region. These efforts in the fields of health and education have been the driving forces behind the heightened awareness of Christianity on the part of the local residents. Apart from this fact, I have felt that there is yet another force that is promoting the growth of the Lutheran Church in this region. The two Japanese persons who accompanied me on the second trip from December 16 to 28, 2004 both accepted Jesus Christ and were baptized at the church in the Illura Village of the Iringa District.

One of these was a person who had once claimed that he would never decide to be baptized in a church in Japan; yet in a matter of only 4 days in Tanzania, he made a 180 degree turnabout in his convictions and was baptized. The other person who was baptized told those present at the ceremony that this action had nothing to do with her own thinking, but that a greater power was at work within her. From this, it seems to me that there is something in this country of Tanzania that can serve to open up the closed hearts and minds of Japanese. This report seeks to find the cause behind this phenomenon, and while comparing the two cultures, attempt to find that factor which explains how the church in Tanzania can experience such rapid growth, while the church in Japan remains stagnant at best.

There is presently very little research available which compares the countries and cultures of Japan and Tanzania. I am convinced that a study of Tanzania, a country which could not be more distant from Japan in terms of geography and awareness, offers a chance to gain insight into Japan and its culture. This investigation of mine has only just commenced, and I am aware of its limitations. With this in mind, I would like to express my deep appreciation to Luther Seminary, which enabled the first of these field trips that started my interest in this country, and also to Japan Lutheran College, which provided special research funds for this second field trip.

注

- (1) Paula Underwood, *The Walking People: a native American oral history* (San Anselmo: Sausalito, 1993)
- (2) この本に出会ったのは、生物学、そして深海魚の研究で著名なルーテル学院大学教授の藤井英一氏の神奈川県津久井の別荘の書斎であった。
- (3) 邦訳では「一万年の旅路」とあるが、「出アフリカ」の伝承を考古学的、人類学的に遡るならば、一万年以上の旅路ということになる。翻訳者の星川淳氏があとがきに記しておられるが「当然、最初は驚きとともに創作を疑った（p 534）のも無理はない。しかし、読み進むにつれて、どンドンと引き込まれてゆく迫力は、口承文学ならではのものである。
- (4) 東京帝国大学で美学を専攻し、和辻哲郎氏の薫陶を受ける。戦後、北森嘉蔵氏の誘いを受け、東京中野区鷺宮にあった日本ルーテル神学校で心理学の講座を担当。現在のむさしの教会の記録に山根能文（のうぶん）という名前で洗礼を受けておられることがわかった。キリスト教に対する情熱は最期まで持っていらっしゃり、旧約聖書の話、クリスマスのお話をよくしてくださっていた。病床にお見舞いに行った時「牧師先生をお呼びしましょうか」と尋ねると、「懺悔をしなければならないな」とおっしゃっておられたが、2001年私がアメリカ留学となり、また、先生ご自身も言葉を発する事が不可能になり、葬儀は先祖代々の但馬藩の大名の直系という伝統もあり、仏式で営まれた。しかし、葬儀の中で讃美歌が歌われる等、師の生前の宗教観の一端が表れた葬儀であった。東京音楽大学で長らく美学を教えておられ、東中野のご自宅で、室町時代に確立された武家礼法の一つである伊勢流礼法（折り型）を再興され、礼法教室を主宰されておられた。また、日本で初めての長編アニメ（当時は、アニメーションという用語が受け入れられず、動画、あるいは漫画映画と呼ばれた）である『白蛇伝』の原案を上原健の名前で創作し、当時高校生であった宮崎駿氏に大きな影響を与えたといわれている。
- (5) インディアンというヨーロッパ人の立場からではなく、もともとアメリカ大陸に住んでいたということを強調するための呼称であることに注目すべきであろう。ファーストピープルという言い方も昨今ではなされているようであるが、この呼称は、誤解を解消させる点においては、非常に良いと思う。
- (6) 総合研究大学院大学（宝来聡教授）、鹿児島大学（園田俊郎教授）、愛知県ガンセンター（田島和雄博士）でアンデス山脈の麓、アタカマ砂漠で共同研究が実施され、その研究成果がマスコミ等にも発表され始めている。今後、精緻な研究が進み、今までの歴史的常識を覆す結果が出てくるのが期待される所である。
- (7) 19世紀半ばのダーウィンの進化論に刺激されて、社会進化論も展開され、ヨーロッパが最高度に進化した社会であり、その発展段階として、アフリカ、アジアの社会が研究対象として当時の研究者達の関心が注がれる事になる。「未開社会」という用語は、そのような「文明」に対する対立的用語である事に注意をしなければならない。
- (8) 東アフリカにおいては、タンザニアのインド洋に面するバガモヨという町に「奴隷」が集められ、ザンジバルに送られ、売買が行われた。そして、主としてアラブ地域に送られていた。バガモヨは、リヴィングストンも訪れた町であり、モスクの遺跡も発掘されており、かなり古い町である。
- (9) ミネアポリスに居を構えられた事により、ミシシッピ川をはさむツインシティーであるセントポールのルーテル神学校（ルーサーセミナリー）でも「ドクターコヤマがミネソタにいるのか」ということで、仏教に関する講義をエキュメニズムの立場から担当されることになった。

- (10) Kosuke Koyama, *Mount Fuji and Mount Sinai: A Critique of Idols* (New York: Orbis, 1984)
- (11) 北森嘉蔵氏の卒業論文が、現在ルーテル学院大学の図書館に保管されている。
- (12) Kosuke Koyama, *Water Buffalo Theology* (New York: Orbis, 1999) p33.
- (13) Kosuke Koyama, *Theology in Contact* (Madras: The Christian Literature Society: 1975) p69.
- (14) 「敗者」あるいは「弱いもの」の歴史は、民話、あるいは神話の中に垣間見ることはできる。日本に多く見られる鬼退治の話も、アイヌ、あるいは縄文人を北方に「征伐（追いやった）歴史に他ならない。
- (15) Heinz Schnepfen, 'Zanzibar and the Germans: A Special Relationship 1844 - 1966', National Museums of Tanzania Occasional Paper No.10. p1.
- (16) Ibid. p1.
- (17) 志岐氏も加藤清正、小西行長の豊臣側に負けたグループであるから、その歴史は志岐氏の子孫の伝承を伺うこと、あるいは小説（司馬遼太郎）にしか、その存在を知ることではできない。
- (18) Ibid. p2.
- (19) Ibid. p2.
- (20) この記録は、へへ族の子孫であるサガ氏からの聞き取りを元にしてしている。
- (21) タンザニアのルーテル教会の牧師からのヒアリングである。アメリカの宣教師によると、30年前も同じ水準であったようだ。退職後の年金制度もなく、深刻な課題といえるであろう。しかし、欧米、日本の事情と異なる点も考慮しておくことも必要であろう。例えば、物価水準、自給自足に近い経済状況、大家族制等。
- (22) M. Hartnoll, 'A Story of the origin of the name of Bandar-es-Salaam, which in the old days was called Mzizima', Tanzania Notes & Records 3 (1937) , pp.117 - 9.
- (23) J.M. Gray, 'Dar es Salaam under the Sultans of Zanzibar', TNR 33 (1952) , pp.6 - 7.
- (24) Heinz Schnepfen, Zanzibar and the Germans: A Special Relationship 1844-1966, National Museums of Tanzania Occasional Paper No. 10. pp.4 - 9.
- (25) 『古事記』本文冒頭
- (26) 老子「無名者天地之始」、莊子「無為者万物之本也」と対応している。
- (27) 易経「乾為天坤為地」と対応。
- (28) 今回のフィールド調査で、全行程を供にしたドライバーはイスラム教徒であったが、祈りを共にし、およそ「対立」という言葉は、どこにも見出すことはできなかった。彼にとっては、キリスト教とイスラム教の違い、あるいは、イスラム教のスニ派、シーア派という相違等は重要なことではないようであった。
- (29) The Dioceses of the Evangelical Lutheran Church in Tanzania, 1998 (Source: Bayrusches Missionswerk, Neuendetelsau)をもとに集計した。
- (30) J.L.Krapf, Dictionary of the Swahili Language (London, 1982) Preface.
- (31) 1998年8月7日のアメリカ大使館爆破により、10名の犠牲者が出ている。また、犯罪数も増加しているが、スペインの列車爆破、アメリカの9・11による多数の犠牲者のことを考えれば、日本の外務省が、タンザニアの沿海部を広く「注意をすべき地域」としているのは、公平ではないという印象を否めない。
- (32) Frieder Ludwig, *Church & State in Tanzania: Aspects of a Changing Relationship, 1961-1994* (Leiden: Brill, 1999) p181.
- (33) 門脇佳吉 『日本の宗教とキリストの道』岩波書店、p3
- (34) 国学院大学の学長であられた故上田賢治氏はルーテル神学校の神学セミナーの講演で、「神道家には、必ず神体験がある。ただ、それを言わないだけだ」と、語っておられた。